
これが俺の学園LIFE!!

代打バース

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

これが俺の学園LIFE!!

【Nコード】

N0336F

【作者名】

代打バース

【あらすじ】

全寮制の高校『私立凜海堂学園』で晴れて2年生になれた宮岡拓彼の新たなクラスメイトや先輩、妹もろもろを巻き込んだ騒々しい学園LIFEが始まる。コメディなお話。

0 プロローグ（前書き）

見辛いかもしれませんが、読んでいただけると嬉しいです。

0・プロローグ

春の氣候って素晴らしいですね。ポカポカしていてとても過ごしやすい。

こんな日はまだ少し残っちゃっている桜を見ながら優雅に学園生活を楽しめるとしようか。

「拓！」

人がせっかく優雅に学園生活を満喫しようというのにいきなり大声を出すとは何事ですか。うるさいなあもつ、ここは教室だよ？

「この前、お前に送ってもらったエロサイト閉鎖してたぞ！」

何を白昼堂々、教室のド真ん中で言ってるやがりますかあコイツは！？しかも大声で言うこと？ああ……女子の視線が痛い。

「拓君て見掛けによらず……」とか聞こえてくるし。

「どういうことだよ？せっかく昨日久しぶりにオナ——」

「それ言ったら18禁になっちゃうだろがぁ！」

とりあえずこの馬鹿をデストロイ！良い子達のためにもここはそういう発言は控えてもらわなきゃ。

あ、自分は良い子達の味方、宮岡拓です。この話の主人公的な立ち位置ですね。ちなみにデストロイしたこの馬鹿は佐藤則孝、悪友みたいなもんです（親友ではない）。

「お、俺は……ただ……オナ——ゴフツ」

はぁ、はぁまだ息があったか。しかしこれで……。

「つたく、男はみんなそんな奴ばかりなのかしらね？」

後ろから聞こえてくるこの凜としていて綺麗、それでいて少しトゲがあるボイスは——。

「まったく。宮岡君は違うと思ってたのに」

我がクラスの人気者、塙山夕妃さんだ。声だけではなく顔立ちも綺麗なポニーテール少女だ。

ここで塙山さんのポニーテールについて詳しく、詳しく語りたいと思う。塙山さんのポニーテールはゴールデンポイントと呼ばれる位置よりも若干、高めで結ばれている。このゴールデンポイントよりも高めに結ぶ子の特徴は、个性的で強気な子が多い。また、低めで結っている子は大人しく、控えめな子が多いらしい。さらに言う——。

「いやいや、もういいよ」

呆れ気味に言う塙山さん。でもまだスーパーポニーテールタイムは終了してないよ！？

「何を言っただよ塙山さん、俺は大好きだから（ポニーテールが）」

「へ……」

ボンツと顔が赤くなる塙山さんだが、何が起きたかはさっぱりわからない。病気だろうか？とても心配だ。

「あの、塙山さん。大丈夫なの？」

「へ？え、ええ、だ、だだだた、たいじょうぷよ！？」

駄目だあ！何かが塙山さんの身に起きた！すると、急に俺の隣の隣の席の女の子が立ち上がって、こちらに向かって来た。

「夕妃、落ち着く」

そういつて彼女は塙山さんを落ち着かせようとする。彼女は塙山さんの親友、一瀬葵さん。勉強も運動もできる子なんだけど、あまり塙山さん以外の人と喋っているところは見ることがない。

「宮岡が好きなのはポニーテールとエロだから……聞こえてない……」

うんうん、ポニーテールとエロは最こ……って！

「おいっ！エロって、いやまあ否定するのは健全男子にはできませんが、いやあの、ねえ？基本的にそこまでエロくはない……つもりです」

「じー……」

否定する俺は一瀬さんに探りを入れられるように、観察されている……と思ったのだが、一瀬さんは俺のある一点を凝視していた。

「……どこを見てます?」

「股間」

無意識に手で抑える。

「いいもん、持ってる」

親指を上げてサムズアップする一瀬さん。アンタそんなキャラだったの!? アンタこそエロ好きだろ!?

「大好き」

……真面目で硬派なイメージだった一瀬さんが崩れていく。というか心の中、読まないで!

「淫らで妖艶なイメージ」

止められねえ! 塙さんは何かまだ顔が赤く、ぶつぶつと何か言ってるし、馬鹿(則孝)はデストロイされたままだし。

「気持ちいいことしたことは?」

「キモチイイコト……トハ……?」

せめて、温泉のマッサージとかであってくれ。

「エッチ」

……………。

父さん、母さん、息子はとっても個性的な友人に囲まれて学園生活を送っています……心配は……とてもしてください！俺の貞操が、貞操があー！！

「落ち着く。まずは屋上で野外……いや、体育倉庫が定番」

「何の！？」

「エッチ。行かないの？」

「行きませんっ！！」

今年で晴れて高校2年生になった俺ですが、生きて卒業できるでしょうか？むしろ3年生になれますでしょうか？

「セック——」

「もういいわっ！！」

0 プロローグ（後書き）

どうだったでしょうか？基本的にエロは少なめにしようと考えてはいるんですが……（笑）

1・今、俺の戦いは幕を開けた！

朝から大変な目にあってしまった……とりあえず、塙さんには俺が好きなのはポニーテールということを理解してもらい（何故かクリスマスにプレゼントが貰えなかった子供くらい残念そうだった）、一瀬さんには……うん、あまり関わりを持つことをやめようと決心をした。

「……眠い」

現在は4時間目の授業中、科目は現国。教卓で話している教師が何を言っているのかまったく頭に入っていない。

「ん？」

ボーッと隣を見ていたら、隣の隣の席の一瀬さんと目があってしまった。

「ニヤリ」

妖しく、また美しい笑みで俺を見ている。可愛いけど何か、こう、捕食者のような感じが滲み出ている。

「うつ……」

耐えきれずに前を向き直す。やはり彼女の認識を改め直すしかない。

そして俺の前の席はポニーテール少女の塙さんなのだ。必死に何かノートに書いている。気になる、超気になる……どう見ても黒

板を写しているようには見えないし。

「……ちよつとだけなら」

若干、身を乗り出して塙さんのノートを見る俺。

……衝撃。

ノートの中には

「宮岡拓宮岡拓宮岡拓宮岡拓宮岡拓宮岡拓宮岡拓宮岡拓宮岡拓宮岡拓宮岡拓宮岡拓宮岡拓宮岡拓宮岡拓宮岡拓宮岡拓宮岡拓——」の文字がぎっしり。……超怖い……やっぱり俺何かしちゃったよお！

「ハアハア……拓君……ハアハア」

塙さん息荒くない？何か体が火照っている気がしないでもないし、やっぱり病気なんじゃ……。

「塙さん」

「ハアハア……え！？あ、ああ、な、何かな、拓く——いや、宮岡君」

「何か熱っばいよ、保健室行く？」

「だ、大丈夫。いつもの……いつものことだから。ハハ……」

持病か何かなのだろうか。直接聞くのは気が引けるし、後で一瀬さんにでも聞いて……いや、やめておこう。

「そっか……うん、無理しないで」

「あ、ありがとう」

塙山さんにはちゃんと気を遣ってあげよう。

持病持ちの塙山さんとか実は超淫乱な一瀬さんとかこの学園、凜海堂学園にはいろんな人が多い。結構な進学校らしいし、俺のように他県から来ている人も多いからだろう。

「おい拓！言われた通りのあんパンとメロンパン買ってきたぞ」

ちなみに現在昼休み。この馬鹿則孝にはお使いを頼んでいたわけです。

「サンキュー。はい、お金」

「おう。それにしても、俺は何で4時間目まで寝てたんだ？」

そうなんです。コイツはついさっきまで寝てたんです。まあ、元凶は俺なんですが……。

「知らないよ、寝不足だったんだろ」

「そうかもな！」

やっぱり馬鹿だわ、コイツ。

「そついやさ、お前の妹もこの学園に来たんだろ？詳しく聞かせてくれよ！」

何故そのことを知っている……俺だって先日知ったばかりなのに。

「まあ、来てるけど対して仲が良いわけでもないし」

実際に仲は良くない。この学園に来るまでは、

「邪魔だからあっち行って」とか

「一緒に学校行くつもりないから」とか散々言われたもんだ。

「対して可愛くは……ないとも言い切れないけど、性格最悪で脳筋以上」

実際の妹なんて所詮そんなもんだ。どれだけ2次元に出てくる妹が愛らしいと思ってる。

「可愛いんだな！？他に容姿の特徴は？」

「えーと、胸はA Aカップくらいで恐らくショートカットの髪型」

「もしかしてこの子か？」

則孝は携帯を見せてきた。そこに映っていたのは――。

「……まりな」

妹だった。

「え？どれどれ私にも見せて見せて」

「私にも」

妹の話が聞こえたのか、塙さん＆一瀬さんのペアまで来た。

「この子だって！可愛いよな？」

「ああ、この子が私の義妹になるのか……」

「え？」

「い、いや、何でもない！」

物凄い勢いで首を降る塙さん。良かった、さっきよりは調子が良さそうだ。ただそんなに頭を降り続けるといけないぞ。

「馬鹿兄貴！！」

教室のドアの辺りで凄い聞き慣れた声、というか妹の声。そう、そこにいたのは紛れもない妹の宮岡まりなだった。

1 今、俺の戦いは幕を開けた！（後書き）

何か自分でもわからないキャラになってきました……（特に塙山さん）

2・妹暴走、その他も暴走

「馬鹿兄貴!!」

やっぱりそこにいたのは約1年ぶりに見た妹だったわけなんですが……。

「呼んでるんだから早く来なさいよ」

相変わらず俺に対して凄く冷たいですね……。

「ひ、久しぶりだな、まりな。元気か？」

「そんな挨拶はいらない。それよりも2年生であたしのこと、盗撮とかしてる人いない？」

盗撮って……こんな胸AAカップが好きな奴とかいるの? いや、いるよな、うん。貧乳もまた一つのステータスだもんな。それよりも盗撮なんてする奴いたかな——あ。

「あれ」

俺は則孝を指差す。すると、まりなは親の敵を見たかのような形相をした。もう、般若なみ。

「あんたはああ!!」

まりなが則孝に向かって全力疾走。そのスピードは恐らく、音を

置き去りにしたのではないだろうか。気付いた時にはもう、則孝の顔面にまりなの膝がめり込んでいた。

「あんだ、この前あたしの周りでこそそしてた奴ね」

「……あ、あ……う……」

「何とか言え！」

言葉を発することさえ、困難な則孝に追い討ちをかけるように蹴りを入れるマイシスター……。

「お、落ち着いたらどう？」

「冷静になるべき」

則孝の近くにいた塙山さん＆一瀬さんペアがマイシスターまりなを止めに入る。危険だあ！二人とも逃げろお！

「え？……あ、は、はい。すみません、気が動転してしまっ……」

意外にも控えめな反応にお兄ちゃんビックリだ。もっとこう、

「はあ？邪魔しないでくれる？」とかかと思ってた。

「いや、多分こいつ（則孝）が悪いんだと思うし。自業自得でしょ」

「人として駄目。いや、生物として駄目だから」

そして案外冷たいお二人。特に一瀬さん、生物としてNG出されたらそいつも駄目じゃないですか、いろいろと……。

「で、ちよつと宮岡君と話してるの聞こえちゃったんだけど……盗撮ってコレ？」

塙山さんは則孝の携帯を取り上げ、さっきまで見てたまりなの画像を見せた。

「こ、これです！やっぱりアンタが……」

「落ち着け、まりな」

とりあえずここは落ち着かせないと面倒になっちゃうからな、お兄ちゃんとしてここははつきりと――。

「邪魔するな、○起不全野郎！」

な、ななななナニを、いや、何を言ってますかぁ！だいたい不全じゃねえよ！？正常だよ、むしろ正常すぎて――いや、R指定じゃないからね、この話？言えませんよ。というか、そんな言葉どこで覚えたぁ！

「イン。なんだ」

ああ、やっぱりか、やっぱりきたかエロ魔神一瀬葵！

「わ、私はそれでも、その受け入れるよ……」

塙山さんまで何を言ってるんだ！違う、そういう話じゃないってば！

「俺は正常です！不全じゃない。んでもって落ち着け。暴力だけじゃ解決するものも解決しないぞ！」

「むう……」

落ち着いてくれたのか、まりなは握りしめていた拳をほどいてくれた。

「なかなか大きい、でもイン。」

「だ、だいたい、人の価値はそんなところじゃなくて——」

もう、こっちの18禁と暴走特急は置いてこ。

「それで、則孝。確かにまりなの画像を持っていたわけだが、盗撮はしたんだな？」

「ふあ、ふあい（まだうまく喋れない）」

「よし！やっていいぞ、まりな」

「うん！」

「ひよ、ひよっとまってえ！はっき、ほうりよくじゃかいけつしな
いて……」

何を言ってるのコイツ？人の妹に手を出しておいてただで済むと思ってるのか。

おっと、すでに気絶したか。

「まったく。入学早々困ることばっか」

「そういう時は兄を頼れ」

「馬鹿じゃないの？気持ち悪い、だいたいコイツだってアンタの友達なんでしょ？」

則孝が友達？

「いやいや、ないから。顔見知りというかパシリ」

「……まあいいわ。じゃ昼休みも終わっちゃうから戻るね」

「お前はいつから変わったんだ？昔はおにーたんってなついていたのに……」

「いつの話だあ！」

まりなの拳が顔にめり込む。仮にも乙女が、グーで……。

「戻る！」

ブンブンしながらまりなは自分の教室に戻っていった。さて、これらをどうすればいい？

「……………う」

死にかけの則孝。

「行為を行う場合はバイ。グラとかオススメ」

エロ魔神一瀬さん。

「だからその例え拓君が、その、ふ、不全だとしても私ならそういう行為も無理にしようとは思わないし、不満なときはちゃんと自分で慰めるから、えとその——」

暴走しまくる埴山さん。

うん……放置しよう。

2・妹暴走、その他も暴走（後書き）

エロくなってしまうですね（笑）。まあ面白けりゃなんでも良しで！

3・今日も大変な一日になりそうだ

ぴぴぴぴ、ぴぴぴぴ。

「……朝？」

とりあえずうるさい目覚まし時計を止める。しかし体がかなりだるい。これはおそらく昨日いろいろとあったせいだろう、体がかなり疲労している。

「学校行きたくねー……」

しかし無情にも今日は平日、ゆっくりと休みの取れる日ではない。

「でも行くしかないよな、そろそろ朝飯の時間だし」

こうなったら昨日はなかったことにしよう！忘れるんだ！うん、なんか気持ちが楽になってきたぞ。

「そうと決まれば早速準備しますか」

パパッと準備を終わらせる。寝癖も直し、顔も洗い、朝の生理現象も沈静化した。完璧だ……完璧な宮岡拓だ！

「よし！行くか」

俺は意気揚々と隣室を蹴破り、寝ていた則孝を叩き起こして食堂に向かった。

「いやあ、昨日は大変だったな！お前の妹さん、デングジャラスすぎだぜ」

妹がデングジャラス……何を言っているんだ則孝。そんな事実は昨日ないぞ？

「でも可愛かったな」

あんなことされても挫けないとは——いやいや、あんなことかなかった！うん、なかった！

「私もビックリしたよ」

「元気な妹さんだった」

ブレックファーストを食べていた俺たちの所に来たのは塙山さんと一瀬さんの黄金コンビだ。昨日は二人のもう一つの面が——って昨日は何もなかったよ！

「宮岡」

「ん？何かな一瀬さん」

「朝。ちした？」

な、なななな何を言ってる！！この話はそんなにエロ重視してないのに、この人のせいでエロが普通になってきちゃったよ！？

「ちょ！おま！」

「おま？おまん——」

「駄目エ！もう嫌だあ！」

「私、まだ全部言ってない」

耳の辺りまで口が避けたように怪しく笑う一瀬さん。駄目だ、昨日のことを思い出してしまう！

「ていうかガラツとイメージ変わったな一瀬。何か凄く話が合いそう」

馬鹿なことを言う馬鹿。

「私はお前とは話す気にさえならない」

「何で！？」

「生物として好きじゃないの」

……………。

「うつ…………うつ…………うつ」

則孝の目に涙が…………頑張れ、俺はいつまでもお前とは話はしてやるぞ！友達じゃないけど。

「うわああああん！！」

則孝の目に溜まっていた涙は遂に決壊し、食堂を飛び出してしまった。

「何か悪いこと言った？」

「いや、まあ言ったよ……俺でも多分言われたらああなと思う……」

もう一瀬さんは駄目だ……いろんな意味で駄目だ。この人は放っておこう。

「……宮岡君……葵とばかり……何で私を見えてくれないのかなあ……私のこと嫌いなもの？……じゃあ……どんなことしたら……振り向いてくれるんだろ……彼の周囲に私しかいなかったら……自然と振り向いてくれるかな……じゃ周囲の人間を殺せばいいの……？」
……断片的にだが殺すとか聞こえてきたんですが……
塙山さん……君は。

「放っておいたら暴走するかもね」

「え！？ど、どんな風に？」

「おそらくは空の鍋をおたまとかでかき混ぜてたり、鉋とか持ちながら襲ってきそう」

何ですか、その妙にリアルな意見。どっかでそんな女の子見たことあるし。

「と、とりあえず。は、塙山さん？」

「まず手始めに——え？み、宮岡君！？」

「落ち着いた？」

「え、あ、うん……落ち着いてきた」

狂気にかられたような表情からいつもの綺麗な表情に戻ってくれた塙山さん。

「困ったことがあるなら言ってよ。助けられそうなことだったら協力するから」

「あ、ありがとう」

顔を赤面させる塙山さんはどことなくいつもよりも可愛かった。しかし――。

ブシューッ。

俺をうつとりした目で見ていた塙山さんは凄い勢いで鼻血を吹き出した。

「は、塙山さん!？」

「幸せすぎて鼻血が出たみたい」

「幸せって何で!?!?といつかなぜ鼻血!?!?」

不思議と楽しそうに一瀬さんは塙山さんを見つめていた。まるで、母親のように。

塙山さんは止めどなく鼻血が垂れ続けていた。

「ああ！塙山さん！今、保健室に連れてくから！」

どうやら今日も大変な一日になりそうだ……。忘れることなんて出来やしないな。

でもこんな日常も悪くはないかも、なんて思っている。

3 ・今日も大変な一日になりそうだ（後書き）

エロはやや多めでいきます（笑）これから頑張って面白くしますの
で、よろしく願いします！

4・休み時間も騒がしいのです

朝から今日は大変だったな。とりあえず塙山さんは落ち着いたけど、則孝のやつは戻ってきていない……。どこで何をやっているんだか。

「み、宮岡君！」

3時間目の休み時間、塙山さんは保健室から帰還なされた。

「今朝はあ、ありがと。恥ずかしいところ見られちゃったね」

「いやいや気にしないで。それよりもホントに大丈夫？」

「うん、もう平気だよ」

「そつか。うん、よかった。それにしてもあんなに鼻血が出た理由はなんなの？」

もしかしたら持病の症状の一種だろうか。というよりもあれだけの量の血が乙女の鼻の穴から出てくるものなのだろうか、むしろ血が足りなくなるのでは。

「い、いやゝわかんないな。私って昔から鼻の粘膜とか弱かったからかな？あ、あはは」

「？ まあ大丈夫ならそれでいいよ」

おそらく、持病のことは隠そうとしているんだろう。ならば深追

いは駄目だ。

「私もかなり心配した」

「いつのまにっ!!」

我がクラス、いや我が凜海堂学園一のエロテロリスト―瀬葵様が俺の隣にいつの間にか特殊召喚されていた。

「というか何かアンタ、血を噴き出してた塙山さんのこと、慈愛たつぷりな目で見てたでしょ!? 心配というより安心してなかった!」

「別にそんなつもりは毛頭ない。ただ単純に結構大きい胸……私が手で確認した時は84センチ。それが血まみれになっているのがエロいと思ってただけ」

「ち、ちよつと葵!? バストサイズ、触っただけでわかるの!? ていうか、宮岡君の前で言わないでー!!」

「これが私の能力」

どんな能力だ……羨まし――くないわっ!! そ、それよりも彼女は触らなくても分かるのではないか? 前に俺のナニも……って思い出したくもない! というか、結構大きいとは思ってたけど84か、ナイス塙山さんのおっぱい。

「とりあえず目の保養になった。夕妃、御馳走様でした」

「お粗末さまでした……って何か恥ずかしい!」

二人のやり取りは面白いね。これが長年つきそった親友のやり取りか……何か心が安らぐね、内容はかなりアウトなんですけど。

「宮岡、お前もそう思うでしょ？」

「え、何が？」

急に話を振られても、すいません聞いてなかったです。

「だから夕妃の胸は男の……。を……。するために存在してるって」

「全部伏字にしましたから！！もう何を言っているかわかりません！俺には全然わかりません！！」

「思春期の男がわからないわけない。もう一回言つよ、だから――」

「どれだけアンタはこの話をエロくしたいんだ！！」

まったく、このエロの権化誰か持って行ってください。

「わ、私は宮岡君の……。だつたら、べ、別にしてもいい！！」

ちよつと、ちよつと、ちよつとおー！？何を言っているの塙山さん！！ダメでしょ、それはダメでしょ！！君はそんなキャラになっちゃいけない、戻ってきて！戻ってきて塙山夕妃！！

「確認するように言うけど、宮岡君のだったらなんだよう？」

屈してはいけない！例え『う』を使われようと俺は負けない！

彼女を助けなくちゃ！！

「戻ってきてえ！夕妃ちゃん！」

「え？」

急にキョトンとした顔をする暴走娘塙山夕妃さん。何か変なこと言った？いや、俺は一人でも一瀬葵予備軍を作らせないために正当なことしか言っただけ！

「今、宮岡君……私のこと、夕妃ちゃんって……」

ああ、そっちね。

「あ、ごめん。やっぱ名前で呼ばれるの嫌だった？次からは気を付け——」

「夕妃ちゃんをお願いします！」

土下座されたあー！！それも額を凄く擦りつけるぐらいの！クラスでもなかなかの人気を誇っている乙女に土下座された……やはり当然のようにクラスメイトから冷たい目線で睨まれる。

「塙山さんとか他人行儀で言われるのはとても嫌だったんです。特に宮岡君に言われるのがとても悲しくて。そして今日、初めて宮岡君は私のこと夕妃ちゃんって呼んでくれた。本当にうれしかった。今も泣きそう。ダメ、ここは耐えるのよ夕妃！宮岡君——いや私も拓君って呼ばせてもらうね。拓君、お願いです。私のことは夕妃ちゃん、もしくは慈愛たっぷりで夕妃と呼んでください。お願いしますお願いします——」

「わかった！わかったから頭をあげてくれ、塙や——夕妃ちゃん！」

「はい！」

塙さん改め夕妃ちゃんは野球部顔負けの大きな声で返事をした。

「えへへ。やっと名前で呼び合う仲までなれた」

「頑張った。夕妃はえらい」

「一瀬さんはエロいよ」

「サンキュー」

何かお礼言われちゃった！？しかもサンキューって、アンタ。ダメだ、褒め言葉としてとらえている……どうやればこの女を黙らせるの？

「じゃ、じゃあそろそろ休み時間も終わっちゃうし席に着こ！ほら、葵も拓君も」

俺たちは夕妃ちゃんに急かされて席に着く。この日はずっと夕妃ちゃんは笑顔だったから、まあ良しとするか。

5・食べすぎはよくありません

最近、週刊ジャ。プだけじゃなくてジャンプスク。アも読んでいる宮岡拓です。どもー。

俺の周囲には可愛い女の子が多いです、それはとても嬉しくて、俺主人公的位置じゃね？とか思ったりすることもしばしば。

しかし、その彼女たちなんですけど……。

「拓君！私と一緒に弁当食べてください！」

と土下座して頼んでくるポニーテール暴走少女・塙山夕妃ちゃん。

「宮岡。海綿体の組織について勉強している。だから見せて」

と変態的発言をまるで当然のように発する生きる18禁・一瀬葵さん。

「馬鹿兄貴、お金忘れたからお昼代貸してくれない？」

と久々の登場でいきなり兄にたかる俺の実の妹・宮岡まりな。

とまあ、個性的な子ばかりで、俺の妄想を一気に打ち砕いてくれます。こんなヒロインばかりの恋愛ゲームはもう、黒歴史ですよ。

「」「聞いてる！？」「」

「き、聞いてるよ！夕妃ちゃんと昼食の件は可。一瀬さんの話は完全に無理。まりなは、ほら500円ありや足りるだろ」

「ありがと！拓君、今日私凄く多めにお弁当作っちゃったから一緒に食べてくれる人探してたの！葵も、まりなちゃんもどう？」

「なぜ無理か。まあ夕妃のお弁当に免じて今は許す」

「あたしもいいんですか？で、でも馬鹿兄貴からお金借りちゃったし……」

「いいのいいの。みんなで食べた方がおいしいでしょ。お金だって返せばいいんだし」

「じゃあ先輩の好意に甘えさせてもらいます。返す馬鹿兄貴」

まさかこの超個性的軍団全員と食べることになるとは。嬉しいのか、それとも悲しいのか俺の心は、今まで仲のいい男子友達を異性として意識してしまい関係が今までのようにうまくいかない女の子のように複雑なのだ。

「それにしても弁当の量、おかしくね？」

そう、俺たちの前に並べられる弁当の量はクラス全体で立食パーティーが楽しくできるぐらいだと言っておこう。

「えへ。作りすぎちゃった」

「もう、夕妃はおちゃめ」

「いやいやいや！おちゃめとかのレベルではないでしょ！？何これ？4人でも食べられないよ、無理だよ？クラスの力一丸にしないと食べきれないよ？」

もうこの量を食べつくすにはそうする以外ない。

「男だろ？ちゃんと食べるよ、馬鹿」

この脳筋愚妹は何を言っている！？俺は男だ、認めよう。しかしなあ、さすがに……。

「……いただきます」「」

すでに3人は食べ始めやがったよ！？もうやるしかない、俺の底力を見せてやんよ！

「情けない、妹として恥ずかしいね。何であんたの妹になっちゃったんだろ。これだけは親を恨むよ」

「ひ、ひどくね……さすがにそれは……」

「ここは保健室。俺たちはなぜここにワープしてるかっていうところだ。」

「ちょっと前」

「俺の底力を見せてやるよ、ここからここまでは全部俺が食うー！」

と、明らかに一人では食べきれない量を指定する俺。むしろ5人でもいけるかわからん量だ。

「おおおおおおお！！！」

……てなつたわけなんですけど。まあ無理でして、お腹を壊しました——そのまんまの意味で。それで介抱役にまりながついてきたというカオス展開なわけなんです。

「まあコメディ小説だからお腹が壊れてもなんとか治るものよ」

そう言うのは保健教諭・永森若菜先生。まだ若いが、かなりベテランの雰囲気がある。まあ単純に老けて——。

「切開！」

「危ねっ！！！」

若菜先生はメスを数本、俺に向けて本気で投げてきた。

「当たったらどうするんですか！？！」

「どうもしない。そのままゴー・トゥ・ヘル」

まったく笑えないんですけど……この人、まったく笑えないんですけど。

「ち」

おいこら、まりなああ！！今、舌打ちしたよな！？お兄さんが助かって舌打ちしたよなあ！？

「とりあえず私のこと、老けてるとか思ったり、万が一口走ったりしたら死ぬと思って」

「……了解です」

この学園の保健室は安らぎの場ではないようだ。

「じゃああたしは戻るから」

「おう、サンキューな」

こちらを一瞥もせずに保健室から出るまりな。何でこんなに俺に對して冷たいの？でも、保健室まで連れっててくれたしな……は！まさかツンデレ！？いや、デレたまりななんて見たことも聞いたこともないぞ。

「何か複雑な兄妹関係だな……よし、お姉さんに話してごらん」

「お姉さん……？」

「どうやら、君は命はいらないと見た。消えろ、宮岡拓」

「すいませーん！ー！」

俺は襲いかかるナイフの嵐からギリギリのところで避け、保健室を出ることに成功した。

「死ぬかと思つたぞ……」

現在地、屋上。ここならあの人の悪口を言つてもナイフは届かんだろう……まあほんとに言つたらナイフ飛んできそうだから言いませんが。

「ここで何をやっている」

凜とした綺麗な声。

そこにいたのは、長く黒い髪をした超絶美人。

彼女を知らない生徒はこの学園にはいない。

そう、この学園の生徒会長——橘涼子がここにいたのだ。

6・メイドって漢のロマン

「ここで何をしていると聞いているのだが？屋上は立ち入り禁止だぞ」

橘会長は冷たい視線を向けてくる。しかしそんな視線なんか気にならないほど、彼女の格好はおかしかった。

何でつて？それは男なら、いや漢なら一度は妄想の中で好きな女の子やキャラクターに着せてしまう崇高なるメイド服をばつちりと着こなしているからだ！

「た、橘会長こそ何でそんな、か、可愛い格好を……？」

「え？ああ、君はメイド萌えなんだな。そうか私は萌えるか。フフ」

何をおっしゃっていられますかこの人は！？……あれ？会長つてもしかして――。

「あの、失礼を承知で単刀直入にお聞きします。橘会長はオタクなんですか？」

「フフ。本当に単刀直入だな、まあその通りだが？偏見を持つか、君も」

生徒たちみんなの憧れ、生徒会長はお高い人かと思っていたんだけどな……ふふ、俺たちと変わらないじゃないか。偏見というよりも親しみを持てる。

「偏見なんて持ちませんよ。俺だってよくパソコンでゲームとかやりますよ」

「そうか、それは18禁か？」

「ええ、おすすめは遙かに。綺麗しのとか、この青空に。束をとかですね……ってい、いや18禁ゲームなんてやってないですよ!？」

「フフ」

「なっ!？」

メイド会長は俺の胸に飛び込んできた。こ、こここ、こ、これは夢か、夢なのかあ!!

「君は嫌いではないぞ。屋上にいたことは不問にしよう」

「あ、ああ、ありがとうございます。しかし会長、あの……その、離れてくれると嬉しいです」

「私のようなメイドにはくっつかれたくないのか」

ニヤリと艶やかな笑みを作る会長。この生徒会長、ぜんぜんイメージと違うぞ!？もっと真面目で硬派な人かと思っていたのに！

「い、いや橘会長はとても美人であります。抱きつかれて自分最高でございます!ただ、こつもう、俺のいろいろなところがピンチなんです!-!」

主に脳内と下半身だが。

「フフ。可愛いな。名前はなんて言う？」

「に、2年、宮岡拓です！」

名前を言うと、会長はゆっくりと離れてくれた。

「では宮岡」

「はい？」

会長はいきなり真剣な目で俺を見つめてきた。

「お前はメイドは好きか」

「え？当然ですよ」

当たり前じゃないですか？メイドが嫌いな漢っていましたっけ？
いいえ、いません。

「この学校の女子の制服がメイド服だったらお前、どうする」

「まず嬉しすぎて泣きます。そのあとにトイレに行ってオナ——っ
てしませんよ、そんなこと！」

何か最近の俺、一瀬さんに毒されてきたみたいだ……。くっ！忌
々しいエロ魔王め！

「まあ何、お前も男だ。そういう処理も大切だ。そして話を戻すが

……私はこの学園の女子の制服がメイド服にさせようと思う」

は？

正気ですか？

「何だその顔は。私は本気だぞ」

「え、えーと冗談でなくて？」

「無論だ」

「な、なるほど……………つて、ええええええ！？」

この人は……………本気だ！なぜそこまでメイド服を？

「なぜメイド服を？決まっている……………」

な、何？

「メイドってなんか良くね？つてさっき授業中に思ってたからだ！」

え、ええええええ？それだけの理由？

「私は言ったことは絶対にやるぞ。宮岡、お前の周囲の女の子がメイド服を着た状態を考えろ」

みんなが……………。

～妄想中～

『た、拓くん。こんな私にお、お仕置きしてくださいあい』

夕妃ちゃん。

『宮岡……私、あなただけのメイド。……奉仕させて……』

一瀬さん。

『ば、バカ兄貴……は、恥ずかしいからこっち見ないでよね！まったくもう……』

まりな。

メイド服ってスゲー！

お知らせ

このたび、この小説を読んただきまことにありがとうございます。
した。

長らく放置してましたがそれには理由がありまして……。

『この先の展開が全く思いつかん!!』

……

と、ということで、完全見切り発車で始まったこの小説はここで一旦、終了とさせていただきます。

勝手だとは思いますがどうか皆さん、怒らないでくださいホントに。応援をしてくれてた方や続きが気になってくれていた方には（いるかわかりませんが）本当に申し訳ないと思っております。

しかし！

現在、この小説をリニユーアルしたものを執筆中であります。

少し変わった拓を始めとする多くのヒロインやまだ見ぬ登場人物。多くのキャラクターや、学園の設定などしっかりと考慮した上で新たな『これが俺の学園LIFE!!』を皆さんにお届けできる日が

近いと思います。

まあ見てやろうという人やほんの少しでも興味を持ってくださった人はもう少し待っていただけるとうれしいです。

たぶん新しいタイトルは『真・学園LIFE!!』とかなんかになりそうです。

まだまだ試行錯誤しながら良い文章になるよう、頑張っている途中です。でもまあ、あんまり期待はしないでください。作者はプレッシャーには弱いんで……（笑）

そして本当に本当に勝手ながら、終了とさせていただきます。

こんな馬鹿な作者ですがこれからよろしくお願いします。 m（

ー） m

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0336f/>

これが俺の学園LIFE!!

2010年10月20日14時04分発行